

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	むらかわ あつし	所属・職名
	村 川 淳	京都大学大学院農学研究科・博士後期課程
e-mail	jundertow.murakawa@gmail.com	
発表題名	Pesca, Turismo y Migración: El Caso de los Uros en el Lago Titicaca	
著者名	Atsushi MURAKAWA	
会議名	2° Coloquio Internacional sobre Globalización y Migración	
開催地(国、市)	México, San Cristóbal de las Casas	
参加期間	2010年 10月 11日 ~ 10月 12日	

冷戦構造の終焉を経た今日のグローバル秩序において、移民をめぐる諸現象への関心はより一層の高まりを見せている。低廉な労働力を求める資本、および労働の機会を求める人びとのトランスナショナルな移動がさまざまな形での接触を生みだし、時に露骨なナショナリズムを発露させている状況を前に、私たちにはいかなる所作が求められているのか——世界で同時進行するこのような事態にラテンアメリカの地域的文脈から接近し、展望を描こうというのが本シンポジウム「第2回グローバルゼーションと移民に関する国際会議」である。ラテンアメリカ・ヨーロッパ諸国を始めとした計43名の研究者がメキシコ合衆国チアパス州に参集し、アメリカ・メキシコ・ペルー・ボリビア・アルゼンチン・スペインなどの諸事例をスペイン語で報告した。

討議内容は、国際的な人口移動を扱う第1セッションから移民の人権を扱う第4セッションまで多岐にわたったが、報告者は、移住と地域社会再編との関係に焦点をあわせる第3セッションにて報告を行った(題目「漁撈・観光・移住—ティティカカ湖のロス・ウロスを事例として」)。事例として取り上げたのは南米ペルーの周辺地域である。

アンデス先住民社会においては1940年代から都市部への移住が広範に確認されるようになったが、ティティカカ湖の漁撈狩猟採集民「ロス・ウロス」社会においてはこの傾向に回収しきれぬ独自の展開があった。彼らの浮島生活がエキゾチックなまなざしの対象となり観光化が進展する中で都市世界との結びつきは確実に深まったものの、彼らの多くは湖岸地域にとどまったのである。

ティティカカ湖岸地域における都市移住の進展を地域的な交通再編との連関において整理した上で報告者は、上記ロス・ウロスの特異な状況には湖の諸資源の存在が深く関わっていると指摘した。伝統的な生業活動・交易活動(物々交換)を放棄し観光業に特化した彼らは、激動する世界経済のリスクを背負い込むに至ったが、観光不振の際には漁撈狩猟採集活動へ回帰するというオプションを常に留保してきたのである。周辺地域における移住現象を対象化するには、先住民の生を支え

学会発表渡航支援報告書

てきたこのような社会領域の包摂——近年、自然保護区としての囲い込み・ネオリベリズムに依拠した石油採掘権の譲渡が進んでいる——を視野におさめる必要があると主張した。

質疑応答においては、メキシコの貧困問題についての研究を進めている方から「観光化のメリットを過小評価しているのでは」とのコメントがよせられたことが強く印象に残っている。シンポジウムが開催されたメキシコ最貧困地域における滞在を通し、地域を越えた先住民の窮状を目のあたりにした時、このような指摘はより一層の緊迫感を伴ったものに映った。

現地滞在期間中には「ラテンのノリ(メキシコ版)」に驚かされることも度々であった。シンポジウムというオフィシャルな場においても、討議が予定開始時刻に始まらないのは「ご愛嬌」といったところであろうか。

「場所が違えば勝手も違う」と、あたりまえの事実を再度確認して帰ってきたわけではあるが、普段と違った環境に身をおきながら、歴史的背景を異にするさまざまな人々と膝を交えて語りあうことこそが国際学会の醍醐味とも言えそうだ。得がたい機会を与えてくださった GCOE 関係の諸氏に、この場を借りてお礼申しあげたい。

